



記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 平成 26 年度浅田学術奨励賞受賞報告
- ♪ 学会参加リポート
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 第 2 回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

「文武両道」に思う

入口 豊（大阪教育大学）

今年度のプロ野球ドラフト会議において、京都大学理学部 4 年生の田中英祐投手がロッテ球団の 2 位指名を受けたことが話題となった。さらにその直後立て続けに、同じく京都大学が 42 回大会ぶりに第 46 回全日本大学駅伝出場を決めて、その立役者となった同大学 3 年生の平井健太郎選手が注目を集め、いずれも「文武両道」を成し遂げた選手として脚光を浴びた。

彼らがそこまで世間の注目を集めた理由の一つは、指導者や練習環境に恵まれない国立の総合大学、しかも旧帝大の東西の双璧である京都大学の秀才が日本の男子学生のトップクラスの競技種目において秀でた才能を発揮したことによると思われる。逆に言えば、文と武を高い次元で両立させることがどれ程の努力と困難を伴うものであるかを誰もが理解しているからに他ならない。

児童、生徒、学生にとって、授業・学習が「文」であり、課外活動としてのスポーツが「武」であるとすれば、「文武両道」を実現できる児童、生徒、学生を育てることは、私達体育・スポーツ教育関係者にとっても理想である。今回のこの出来事は、「文武両道」にこだわりを持ち続けてきた私自身にとっても実にホットなニュースであった。大学の体育学・スポーツ科学研究者の方々からは、中途半端とお叱りを受けることは承知しながらも、私はあえて大学研究者と男女体育会サッカー部監督の二足の草鞋を 35 年間も継続してきた。それが私自身にとっての「文武両道」と信じてきたからである。

自慢話になるが、本学男子サッカー部はスポーツ推薦選手入学がほとんど期待できない中で、関西 60 大学の 1 部リーグに国公立大学唯一のチームとして参戦を果たし、女子チームは大部分がサッカー未経験者で構成された少人数チームで過去に 10 数回のインカレ出場と 3 回の全国 3 位入賞を果たしている。無論のこと、チーム内に体罰やハラスメントの類の問題は一度も発生したことがない。近年、体罰問題を中心に学校教育における部活動の教育的意義や存在意義が問われているが、これまでの私の監督生活を振り返ると、レギュラー、サブに関わらず、授業以外の私生活の大部分を割いて大学体育会運動部を 4 年間継続して卒業していく彼・彼女らのその後の指導者としての成長ぶりを見ると、やはり部活動の教育的意義は極めて高いというのが私自身の実感である。

5 年前に本学男子サッカー部から初の J リーガーが誕生した。彼は大阪府内の進学校から一浪して本学の数学専攻に入学してきた全く無名の選手であったが、当時 1 部リーグの強豪

私立大学との対戦相手選手を目当てに来ていたプロのスカウトマンが逆の対戦相手である
本学の俊足技巧派の彼に目をつけたのである。4年生当時、大阪府の高校数学教諭の採用試
験に合格していた彼は、教員よりも給与水準の低いJ2 チーム入りを決断し、リーグ戦にも
度々出場を果たしたが2年の契約を終えて、現在は高校数学教師となりサッカー部の指導に
もあたっている。

この事例を元に私は、自分の体育原理、スポーツ教育学の授業の中で、学生達に次のよう
な質問を投げかけてきた。「君たちの多くが、卒業後、自分の母校のような高校の体育教師と
なって、自分の専門種目の顧問として全国大会に出場させたいと思っている。しかし、赴任
した高校にすでにサッカー部の顧問がいて、その先生の専門教科が数学で、しかも元Jリー
ガーの肩書きを持っているとすればどうしますか？ 恐らく、別の部活の顧問を頼まれると
思うが、そうなれば夢破れて、教師の職業を辞めますか？」と。

教師にとって、まず全ての児童・生徒に対してしっかりとした授業を行い、生活指導を行
うことが本分すなわち「文」であり、課外活動指導はあくまで「武」であって、職業として
も「文」と「武」の逆転があってはならないはずである。私は、「①教師の職に就く動機第
一がクラブ活動指導という『武』の部分から入るのは本末転倒ではないのか。②例え、自分
の専門種目の顧問になれなくとも、体育教師としての自身のフィロソフィーをしっかりと持っ
た上で、いかなる困難にも挑戦すべきではないのか。③学校では、国・数・社・理・英を主
要5教科といい、音楽・美術・体育科等は実技教科・周辺教科と言われている。何の教科の
であろうと、教師であると言うベースは同じでその上に教科があるはずであり、一教師とし
て誰とでも対等に意見を交わせなければならない。職員会議で生活指導や体育祭の話題の時
だけしか発言できない体育の先生でいいのか。④体育教師がスポーツクラブの指導に当たる
ことは学校現場の常識となっているが、例えばクラブ指導のできる他教科の教員を上回る体
育科教員たる専門性とは何なのか。」と、専門職としての体育科教員のあり方を考えてもら
うために語りかけてきた。

とはいえ、体育科が運動実践を伴う実技教科であることは自明であり、私達は常に運動実
践と向き合う職業である。大学の体育教員の中でも、理論や実験科目だけで実技指導を持た
ないケースは大規模な体育・スポーツ専門学部の教員以外には稀である。学問的・理論的研
究が私達の「文」だとすれば、一般学生への実技指導、あるいは理論授業という「武」に、
それをどれだけわかりやすく反映させられているのか、反省的实践家としての体育教師
(Physical education teacher as a Reflective practitioner)のあり方を今一度問い直
す必要があるのではないか。

京都大学生のプロ野球ドラフト指名のニュースは、こんなことを私に想起させてくれたの
である。

入口 豊 (iriguchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)

体育哲学考

文化としての「スポーツ」

大橋 道雄 (東京学芸大学)

「菊の香や奈良には多き・・・」本年も奈良国立博物館で正倉院展が開催されまし
た。第2次世界大戦中、正倉院の宝物は戦災を逃れるために同博物館に預けられました
が、戦争が終わりそれらの宝物を返還する事となりました。その際、奈良の市民からそれ
らの宝物を公開して欲しいとの強い要望があり宝物展が開催されるようになった訳です。

戦後間もなくであり生きることに懸命であり美術鑑賞など及びもつかない状況が想像されます。そのような生活環境にも拘わらず、宝物の鑑賞を求める人々の想いや文化財の持つ力が忍ばれます。戦時下の抑圧された状況の中での「美」への渴望もあったでしょうが、文化財に触れることで人々は明日への希望を持つことができたのではないのでしょうか。「文化」とは人々に支えられ、また、それに耐えうる価値を持つものでなければならぬのでしよう。

とまれ、スポーツは「文化」であると我々は声高に唱えますがはたしてどうでしょうか？

ベルナルド・ジレはスポーツの特性として「遊戯性」「競争性」「激しい肉体活動」を挙げます。また、ヴァンダーズワックは連続体という概念に基づき、中央に「スポーツ」を置き、その両極に、各特性、競争性と遊戯性の薄れたものとして「遊戯」と「競技スポーツ」を位置づけています。そこで、その両極に位置する「遊戯」と「競技スポーツ」から「文化」としてのスポーツのことを考えてみたいと思います。

整然とした騎馬隊の隊列行進の映像とともに「人間の文化は遊びにおいて、遊びとして発展し、展開した」「文化は遊びの形式の中に成立した。文化は原初から遊ばれるものであった。」というテレビC・Mのナレーションを思い出していただけるのでしょうか。これはR・カイヨワによる「ホモ・ルーデンス」の一節です。「遊ぶ」という行為は人間の本質的行為だと看破してくれました。「遊戯性」の特性として「非現実性」を挙げています。また、遊ぶという行為が生まれスポーツにまで発展するためには「時間」と「経済」において「ゆとり」がないと叶わないとも言われています。

「遊び」の持つ根源的な強さを思うとき、東日本大震災の子供たちが瓦礫の中から道具を拾い集めたり工夫して創り出したりして何もなくなくなった広場でスポーツを始め楽しんだというニュースを思い浮かべます。このたびの未曾有の災害のなかで、現実起きた悲劇が大きければ大きいほど茫然自失となったのではないのでしょうか。また、「食べ物をどうしようか」「寒さをどのようにして防ごうか」等々、その日その日を生き抜くことだけに一生懸命の日々が続いたことでしょう。その場にいない日々の生活に何の支障もなく生活できた者には想像のつかない惨状だったのではないのでしょうか。しかし、そのような中においても、子供たちは瓦礫の中スポーツを始める、大震災という悲惨な日常の中でも「非現実」の世界で「遊ぶ」わけです。「遊ぶ」ことで少しは悲惨な実情から離れられ、あるいは忘れさせてくれたのかもしれませんが。また、別の側面から見れば、「遊ぶ」という本質的行為に関わることで人間性を取り戻し、あるいは、癒されていたのではないのでしょうか。このことは、我々がこれまで当たり前過ぎて意識することができなかつたであろう「遊び」や「スポーツ」が本来持つ「力」を思い起こさせ、その原点を再認識する機会を与えてくれたのではないのでしょうか。

「競技スポーツ」を考えると、6年後の開催に向けた現在の「東京オリンピック」狂騒劇が浮かびます。誘致活動が功を奏し開催が決まって以来「オリンピック」礼賛の風潮が流れ、アンチの声はかき消されているように思えてなりません。64年の「東京オリンピック」には「アジアで初の五輪」をはじめとするいろいろな大義があったと理解します。今回の場合「大震災の復興を示す」ことが誘致理由の一つに示されておりました。その誘致活動の中で「東京は安全である」発言が飛び出し、早速公共事業が活況を呈し始めると被災地での復興事業等に様々な悪影響を及ぼしているやに聞きます。

古代ローマ時代の皇帝は民衆の人気取りのために「パン」と「娯楽」を提供していたといわれています。それは、時の権力者が民衆のイデオロギーをコントロールするために、政事への批判を避けるために「娯楽」を提供したわけです。「競技スポーツ」の頂点としての「オリンピック」は人類とってかけがいがかけがいのない「文化活動」です。それだから

こそなお、その崇高な文化財としての五輪が、人々の目をそらすための、開催目的の「本音」を隠す手段として、「イデオロギーコントロール」の道具として使われることに憤りを覚えるのです。

阿部忍は「歴史的社会的現実は変化しつつある。我々はこの変化に対応できるように新たな体育の本質を、絶えず疑問を発しながら追及していかねばならないと思う。」と言います。

現在の日本が流れていこうとする方向性にある種の「危うさ」を感じざるを得ない、そんな今だからこそ、かって、ファシズムに押し流され、あるいは、率先して押し進めてしまった悲しい過去があるからこそ、私たち哲学分野を志す者は、理論的には理解しながら安易さのなかに本質を置き忘れることなく知の蓄積に向けて努力することが不可欠でしょう。そして、時代の風を読み、知を発信し続け、時に警鐘を鳴らすことが必要だと思います。

「文化」としてのスポーツを哲学分野から研究する若い会員の先生方の活躍を期待して止みません。

大橋 道雄 (ohashi@u-gakugei. ac. jp)

書籍紹介

リチャード・バック著：五木寛之創訳／ラッセル・マンソン写真

(2014)『かもめのジョナサン 完成版』新潮社.

石垣 健二 (新潟大学)

本書をご存じの方も多いただろう。初版は1974年、同じく五木寛之氏が訳出している。随分と前(20年近く前?)になるが、井上誠治先生(国士舘大学)が、本会報だったか関連学会のニュースレターで、本書を紹介されたことを憶えている。それだけこの本は、スポーツや身体運動に携わる者にとって魅力的なのだと思う。それが、どういうわけで40年ぶりに「完成版」としてまた出版されることになったのか。それは、Part OneからPart Threeで構成されていた旧作に、Part Fourがつけ加わったからである。リチャード・バック本人が、半世紀前にそぎ落としたPart Fourの原稿を最近になって見つけたらしい。出版界では、今夏いくらか話題になったようであるが、それを聞きつけた私はさっそくその「完成版」を手にするようになった。

私が旧作をはじめて手にしたのは、高校生のときだったはずである。いくらかの記憶はあるが、あまり意味もわからず読んだのではないかと思う。大学時代にも、たまたま友人がこの本のことを語ったことがあり読み返してみた。大学院時代には、ある悩み事がきっかけとなり自覚的にこの本を手にしたことがあった。おそらくジョナサンの無謀ぶりを自分に重ね合わせて読んだのだろう。そして、私自身が一応の仕事に就いてまもなく我ながら少々つらい状況にあったとき、勇気をもたらったのがこの本だった。その後、機会があってこの本について学生用の紹介文を書いたことがある。

さて、それから随分の時間を経て、今回の「完成版」を手にした。やはり惹かれたのはこのセンテンスだろうか。「(ジョナサンにとって) 重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だった」・・・カモメがそれを大事にしまうと、生きづらくなる。生物としての生存という意味においてだけでなく、他のカモメたちとの社会的?関係において生きづらくなるのである。その生き方を貫くのはカッコよい。しかし、それは苦しいことであり、孤独を

ともなう。ジョナサンは飛ぶことそれ自体を追求した結果、ある境地に達するが、彼はその後いわばそれを教える立場に廻ることになる。「他人を愛することを学ぶ」のである。以前読んだときには、かなり教育染みた偽善を感じたように思うが、今回はいずれこうあるべきなのだろうと素直に思えた気がしている。

そんなストーリーによりも、スポーツや身体運動に携わった者であれば、個々のセンテンスに惹かれる。「彼にとってスピードは力だった。スピードは喜びだった。そしてそれは単純な美ですらあった」「最も高く飛ぶカモメは最も遠くまで見通す」「正しい掟というのは、自由へ導いてくれる」「われわれの肉体は思考そのものであって、それ以外の何ものでもない」「ここには彼と同じ考えをもつカモメたちがいた」。スポ根マンガ的な臭いがしないわけでもない。

ところで、つけ加わった Part Four は、これ以降の話となる。それは、もはやジョナサン自身の意思とはかけ離れた話となる。要するに、彼は神格化されるのである。神格化されたジョナサンの教えは、多くのカモメにとって形骸化したものになるが、それでもそれをまともに実践しようとする無謀なカモメがまた現れる。そこに希望がある。正直言って、この部分が加わったことでよくなったのかどうかは私にはわからない。しかし、世の中にはよくあることだということだけはわかる。教育ということの結末を暗示しているのだろうか、気をつけなければならない。

やはり今回も、ジョナサンに憧れる自らの凡人さを自覚することになった。また何年か後に読み返し、ジョナサンに少しでも近づけているかを確認しなければならない（そう思う時点でやはり凡人さを自覚してしまう）。とても「書籍紹介」となったようには思えないが、それでも個人的には勇気が出る良書である。

石垣 健二 (ishigaki@ed.niigata-u.ac.jp)

私の研究

「他者理解の身体性」

田中 彰吾（東海大学）

先の8月、出張でスイスのジュネーヴに向かった。国際メルロ＝ポンティ・サークル第39回大会（39th Annual Conference of the International Merleau-Ponty Circle）に参加するためである。この学会はもともと北米のメルロ＝ポンティ研究者を中心に設立されたそうで、例年開催地は北米で使用言語も英語とのこと。今回は久しぶりにフランス語圏での開催ということで、英語・フランス語の二カ国語使用だった。また、主催がジュネーヴ大学の美術史ユニットだった関係で、哲学や現代思想だけでなく、映画、舞踊、絵画など、アート作品を取り上げた発表や講演も多かった。身体論では、フェミニズム、人種表象、障害など、政治・社会的な問題意識から身体を考察したものが中心で、スポーツや身体教育を主題にしたものは残念ながら見られなかった。

私は、ここ数年取り組んでいる他者理解（いわゆる社会的認知）の問題について、メルロ＝ポンティの間身体性の観点から考察した内容の発表を行った。この3年間、科研のプロジェクトの関係で「他者を理解するとはどういうことか」という問いについて集中的に考えている。私たちは、日々のコミュニケーションを通じて、人のことが理解できたと感じたり、理解できないと感じたりする経験を重ねている。では、そもそも他者を理解するとはどういう経験を指すのだろう。認知科学や心理学では「心の理論」という仮説が立てられており、次の前提で他者理解が論じられる。(1)他者は、自己と同じように、外部から観察できない内

面 (=心) を持っており、何かを感じ、考えている。(2)だから、他者を理解することは、他者の心のなかで生じていることを理解することである。(3)ただし、他者の心は直接に観察できないので、推論や想像を介して間接的にアクセスせねばならない。

メルロ＝ポンティは心の理論説が登場する 1978 年よりもずいぶん早い時期に、このような発想にもとづく他者理解を明確に否定している(1951年の講義「幼児の対人関係」を参照)。その際のキーワードのひとつが「間身体性」である。子供の無邪気な笑顔を見て思わず自分も微笑むことがあるように、互いの身体が共鳴する関係が自他間に潜在的に広がっているのだとすれば、このような関係こそ、最も基礎的な他者理解の手がかりであろう。発達論的には、他者の行為を自己の身体で模倣する—ここでの模倣には意図的なものも無意識的なものも含む—経験を通じて、乳幼児は他者の行為にともなう意図を理解できるようになる。だとすると、身体の向こう側に他者の内面を仮定し、それを自己の内面に準ずるものとして類推して理解するという発想で、社会的認知の問題を解くべきではない。

他者理解は、発達論的に見ても、日々の実践に即して見ても、他者の身体行為の意図を直接知覚し、その意図に応答する行為を自己から他者へ返すことで始まる。それは、「内面」の理解である以前に、互いの意図に応答する相互行為であり、また、そこから生じてくる同期や同調、ずれや不一致の感覚に起源を持つものである。今回の発表では、以上の基本的な考えを、メルロ＝ポンティの間身体性と、日本の現象学的精神病理学者、木村敏の「あいだ」の概念に依拠して論じた。「あいだ」や「間(ま)」といった日本語の概念も用いたが、想定していた以上にこちらの話が伝わったらしい。発表後、矢継ぎ早に多くの質問を受け、セッション終了後も場外でさまざまな議論を重ねることができた。

今回の大会には日本からの参加者も散見されたが、発表したのは私一人で、そのことがやや寂しくもあった。この会報を目にしている体育哲学の関係者にも、メルロ＝ポンティに依拠して身体を論じている者は少なからずいるであろう。一度、国際メルロ＝ポンティ・サークルで発表されてみてはいかがだろうか。今年はなかったものの、大会関係者によると、身体教育を題材にした発表が例年は見られるらしい。また、フェミニズム系の発表では Iris Marion Young の「Throwing like a girl」を題材にした刺激的な考察も聞かれた(この論文は身体教育でも問題にしうる)。日本国内で専門分野の近い者と議論するのも悪くないが、各国の研究者と自由な雰囲気の中かで議論するのも刺激的で良いものである。

田中 彰吾 (body_of_knowledge@yahoo.co.jp)

浅田学術奨励賞

受賞報告

私がレガシーを研究する理由

荒牧 亜衣 (筑波大学体育系)

私が「オリンピック」を研究対象として初めて意識したのは、2006年のことでした。今考えれば、とても安易な決断だったと反省しますが、「レガシー」ということばに妙に魅かれてしまったことがきっかけです。

この度、体育学研究 58 巻第 1 号に掲載されました「第 30 回オリンピック競技大会招致関連資料からみるオリンピック・レガシー」が、平成 26 年度日本体育学会浅田学術奨励賞を受賞いたしました。この研究は、2007 年度に提出した修士論文から始まっています。論文に取り組む中で、たくさんの先生に出会い、多くのご支援をいただきました。この受賞は、ひとえにご指導、ご助言をいただきました先生方あつての賜物と心より御

礼申し上げます。先生方にお会いできたことが、今の私の何よりの財産です。身に余る光栄に、気持ちを今一度引き締めて、今後の研究活動により一層励む所存です。

本論文では、オリンピック招致に関連する資料をもとに、レガシーとは何かについて明らかにすることを試みました。国際オリンピック委員会（IOC）は、オリンピック競技大会の開催都市や開催国にポジティブなレガシーを残すことを組織のミッションとして、オリンピック憲章に定めています。特に2000年代に入ってから、招致の段階から、レガシーを計画することを積極的に推進し、IOCは「レガシーなくしてオリンピック競技大会の開催は語れない」というシステムを作り上げました。2020年東京大会の招致においても、このレガシーという言葉が盛んに使われています。しかしながら、オリンピック競技大会がポジティブなレガシーを生み出し続けることは、果たして可能でしょうか。私の問いは、今もこの点にあります。

IOCの組織としての問題、オリンピック競技大会が抱える様々な課題等は「オリンピック」を研究対象とする私自身が、常に持っていなければならない必要不可欠な視点です。レガシーという用語は、近年オリンピック競技大会の枠組みをこえて、あらゆるスポーツ・イベントを対象としても使用されるようになってきていますが、まずは、オリンピック競技大会という文脈の中でとらえ直してみたいと考えています。

私の母は、35年以上教育現場に立つ、体育を専門とする教員です。2020年東京大会招致のプレゼンテーションをテレビで見た母は、多くの日本人がオリンピック・ムーブメントやレガシーといった耳慣れないことばに触れた機会になったと言いました。何を意味するのかははっきりとはわからないけれども、なんだか夢が膨らむような気持ちを感じたようです。私自身はとても複雑な気持ちになったのをよく覚えています。このとき、「あと7年！」と思った日本人は、少なからずいたのではないかと思います。

一方で、開催都市、開催国として東京、日本が＜残さなければならない＞レガシーに関する政策は待った無しの状況に突入し、加速しながら進められています。オリンピック競技大会の開催は、体育やスポーツ、さらには都市や国、周辺地域に大きな変容をもたらす可能性も有していますが、IOCが理想とするポジティブな側面だけではないことも事実です。「なぜ」に対する明確な答えがなかったとしても、開催に向けた準備は当然着実に進められるからです。それでも私は、この「なぜ」について、レガシーを研究することを通じて、考え続けたいと思っています。

荒牧 亜衣 (aramaki@taiiku.tsukuba.ac.jp)

第65回日本体育 学会参加報告

日本体育学会第65回大会に参加して

渡邊 佳（東海大学大学院）

2014年8月25日～28日岩手大学で行われた日本体育学会第65回大会で、ボランティア活動についての発表をさせて頂きました。大学院に入ったばかりの頃は「体育学」でボランティア活動を取り扱っても良いのだろうかと不安に思っていました。ボランティア活動で書きたいことがあって大学院に入ったのなら、そのテーマでやるべきだと先生が言って下さっていたにも関わらず、本当に大丈夫なのかと落ち着かない気持ちだったことを覚えています。私の迷いが解消されるきっかけとなったのが、箱根で行われる体育哲学研究会での7分間の発表です。

2013年7月、箱根の体育哲学専門領域夏期合宿研究会で初めて色々な大学の先生方とお会いし、体育哲学の発表を聞きました。その場に参加した私は、聞き慣れない言葉ばかり飛び交う中で、何でも知っている「人間辞書」のような先生ばかりいるという印象を受け、大変なところに来てしまったと感じました。箱根の研究会では、頻りに「雲上人」という言葉を聞きますが、私にとって、そのようにとても遠くに感じてしまうような先生方が、迷いばかりで具体的な内容のない私の話を聞いて意見を下さったことは、初めて体育哲学領域に触れた私にとって貴重な経験でした。今回、拙いながらも発表できるようなものになったのは、この時の経験がとても大きかったと感じています。

さて、話は戻りますが、今回の日本体育学会での発表は、昨年箱根での7分間の発表を除けば2回目の発表でした。今回の日本体育学会は、2013年8月末の立命館大学での日本体育学会に参加していたので、学会自体の雰囲気に圧倒されることはありませんでした。また、今年の研究合宿で、初めての20分間の発表、10分間の質疑応答を経験し、親身なご意見を頂いていたので、研究会よりは落ち着いていたのではないかと思います。発表前には、質疑応答の時間が10分あることに怖さを感じていましたが、実際に発表が終わってその時になると、質問や意見を下さる先生がいることに、恵まれていると感じました。自分の在籍している大学内に留まるのではなく、学会を通して様々な先生方や、大学院生と関わって色々なものを見ることは、やはり刺激的で面白いものだと再確認しました。

学会という場で、他大学の先生や院生の発表を聞いていると、発表時の話し方や文章に、人柄や雰囲気が滲み出ているような気がして、その先生が何をどう捉えて、どう考えているのかということが毎回気になってしまいます。それまで自分が考えたことがなかったようなことについて聞くことができること、「How to」ではなく、「What」と、体育・スポーツについて問い、討論している先生方のいる体育哲学領域において本当に良かったと思われました。

今年の体育学会は、昨年とは異なり自分にも発表があったため、意識しないようにしていても、やはり不安を感じていました。終わったあとは安心して気が抜けてしまった部分がありましたが、いつも見逃しているようなことを言葉に起こしていく体育哲学の先生方の発表を聞くことができた有意義な時間でした。大学院に入ったばかりのときは、自分が「である」調で断定しながら文章を書くことに違和感もあり、「そんな風を感じている」ことを文章にすることに恥ずかしさを感じていましたが、日本体育学会での発表を終えた今は、自分の中でまとまっていなかったものを曲りなりにも文章へと落とし込んで、それを発表できる場があったことをとても幸運だと感じています。ここで様々な先生方や院生と出会えたことや、様々な意見を頂けたこと。ここでの経験を次へと活かしていけたらと思います。体育哲学という領域にいる今が、今までの学生生活の中で一番楽しいものだったと思っています。ありがとうございました。

渡邊 佳 (w.otobokey@gmail.com)

IAPS2014

参加報告

地球の裏側でスポーツを哲学する

：国際スポーツ哲学会第42回大会参加報告

坂本 拓弥（明星大学）

2014年9月2日（火）18時20分に成田空港を発ち、ナタール空港に到着したのは、同3日（水）14時32分。その間、ダラスとサンパウロの2都市を経由し、合計約32時間の空の

旅を経て、ようやく今回の学会開催地に到着した（ちなみに、筆者が住む東京から学会会場までをドア to ドアで計測したところ、39時間43分であった）。日本との時差は12時間。飛行時間も、ヨーロッパを経由しても中東を経由してもほとんど差がないという、まさに、地球の裏側である。

国際スポーツ哲学会（IAPS：the International Association for the Philosophy of Sport）の第42回大会は、2014年9月3～6日の日程で、ブラジル北東部に位置するナタール（Natal：ポルトガル語ではナタウと発音）において、ラテンスポーツ哲学会（ALFiD：Asociación Latina de Filosofía del Deporte）との合同で開催された。学会会場となったRifóles Beach Hotel & Resortは、その名の通り美しい海と砂浜に面したリゾートホテルであり、学会最終日には土曜日とい



ということもあって多くの家族連れで賑わっていた。また、ナタールという都市については、今年6月のサッカーワールドカップで日本代表がギリシャ代表と試合を行った地として記憶されている方もいるかもしれない。チャーターバスのガイドさんによれば、多くの日本人サポーターがナタールの地を訪れたそうである。さて、以下学会の参加報告として、筆者の印象に残った内容を時系列で報告したい。

学会初日には、日本からの発表者はいなかったものの、今年の日本体育・スポーツ哲学会でも講演されたIAPS現会長のJesús Illundáin氏が、Kevin Krein氏と共同でスポーツにおけるフロー体験と武道における無心との類似性について発表された。また、この日の夜には、会場のホテル内にあるプールサイドにてWelcome Receptionが催された。

2日目のスタートは9時45分であったが、朝早くからホテルの目の前に広がるビーチで、散歩やランニングをしたり、また泳いだりしている学会参加者を多く見かけた（筆者も、一応用意していった海水パンツをはき、深澤浩洋先生とともに大西洋の波に乗ることを試みた）。さて、山口順子先生が座長を務められたEthics and Youth Sportという午前のセッションにおいては、日本でも馴染みのあるSarah Teetzel氏（*Protecting Child Athletes in Sport*）やCesar R. Torres氏（*Boxing and Youth Olympic Games*）が発表された。筆者の印象では、特に前者の問題は今日の日本でほとんど注目されていないテーマであり、昨今の体罰や暴力の問題とも関連して、多くの示唆を得た議論であった。また、この日の午後、筆者は*The Body of the Sports Coach as Site of Existential Meaning*という題で発表を行った。

2日目の夜には、学会が企画した、ブラジルのダンスや音楽を鑑賞しながらの（はずであった）夕食会が開かれた。夜空の下でビールや軽食を取って談笑していたのだが、ふと気づくと、先ほどまでステージで踊っていた10組ほどのダンサーたちがバラバラになり、私たちの席にペアを探しにきていた。1人、また1人と、同席していた先生方が踊りに連れていかれ、もちろん、筆者も連れていかれた。ブラジルの女性ダンサーに優しく手解きを受けながら、ぎこちないステップを踏んだ。その後も、席に戻っては何度も半強制的に踊りに連れていかれ、最終的には100人ほどの大集団で列をなして踊り狂うことになった。その中でふと腕時計に目をやると、深夜0時を大きくまわっていた。まさに、ブラジルの地と人と音楽が持つパワーを、身をもって実感した夜であった。

翌日、学会3日目には、日本から3つの発表がなされた。寺山由美先生（筑波大学）は、

Consideration of learning contents for dance in the Japanese Physical Education Curriculum というテーマで発表された。実際の体育授業の映像を提示されたときに、海外の研究者がそれに見入っていた姿は印象的であった。夕方のセッションでは、同時刻に、関根正美・畑孝幸 (*Anthropology of Solidarity: From Defeat to Existential Solidarity*), 山口順子 (*Enhancing the cultural identity through the body-self unity in the Native American Canoe Journey Project*) の各先生が、それぞれのご研究を発表された。また、筆者の発表の座長を務めていただいた Ivo Jirasek 氏の発表 (*Vastness as the specific category of trans-ocean sailing*) では、氏自身の数十日に及ぶ海上生活経験の分析を通して Vastness という概念が提示され、その際に流された映像が特に印象的であった。それは、360 度、どこまで行っても青い海と波の音しかない映像なのだが、不思議なことに、3 分も見続けていると、Vastness という概念が妙に腑に落ちたように感じられたのであった。

最終日には、深澤浩洋・荒牧亜衣両先生が *Beyond the border and changing public attitudes: Olympic education as intangible legacy* というテーマで共同発表され、その発表後、筆者らは帰りの便の都合上、忙しなく会場を後にした。また、今回の学会には上記の発表者以外にも、小田佳子、石垣健二、高橋浩二の 3 名の先生方が参加された。加えて、来年の IAPS は、イギリスのカーディフで開催される予定である。



坂本 拓弥 (takuya.sakamoto@meisei-u.ac.jp)

運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freeml」(<http://www.freeml.com/>) の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。グループへ参加するには、事務局：釜崎 (kamasaki@meiji.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され、全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧

下さい。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

定例研究会のお知らせ

関根 正美(日本体育大学)

平成 26 年度第 2 回定例研究会を 2014 年 12 月 6 日 (土) に下記の要領で開催いたします。
なお、研究会終了後 18 時 00 分より忘年会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2014 年 12 月 6 日 (土) 15：30～17：30 (予定)
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・1 階 1011 教室
JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分
東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分
都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



発表内容 (予定)

【発表①】波多腰克晃 (日本体育大学) トウルネン＝スポーツ抗争と遊戯促進運動

(Spielbewegung) 初期の展開について-A. シュピースから G. v. ゴスラ

一の遊戯訓令 (Spielerlaß) まで- (仮)

本報告は、これまでのトウルネン＝スポーツ抗争に関する歴史研究に対して再解釈を試みることになる。とりわけ、遊戯促進運動 (Spielbewegung) の初期においてトウルネンを擁護していた人物に注目し、これまでの「トウルネン／スポーツ」という二項対立図式によって示されてきた両組織の関係性について報告する。

【発表②】林 洋輔（筑波大学・国士舘大学）体育・スポーツ哲学における「精神の

修練 Spiritual Exercise」の導入：教育と競技への射程

コレージュ・ド・フランス(Collège de France)の古代哲学史教授であったピエール・アド(Pierre Hadot, 1922-2010)により提唱された「精神の修練」としての哲学観は欧米圏にて多くの議論が横行される一方、わが国の哲学界では殆ど顧みられていない。しかし、この「精神の修練」としての哲学観はいわゆる西洋哲学を通底する哲学観として国際的に評価が定まっているばかりではなく、近年のフランスにおけるスポーツ哲学の理論枠組みとしても採用されている。そこで本発表では「精神の修練」としての哲学観の概要から議論を説き起こし、教育論およびスポーツ哲学に対する応用の方途を検討する。

【発表③】千葉洋平（国士舘大学）じゃれつき遊びにおける子どもの態度や行動の

変容プロセス：特に保育士を視点として

じゃれつき遊びと称される遊びが、子どもの態度や行動の面での問題解決に寄与することが報告されている。しかしなぜ他の遊びや活動で生じない変容が、そこでは起こるのかについて十分な検討はなされていない。本研究では、まず遊戯論や遊びと子どもの変容に関する知見について検討を行う。次に修正版グラウンデッド・アプローチを用いて保育士の語りを分析することで、じゃれつき遊びによって起こる子どもの態度や行動の変容プロセスを明らかにする。また、それによりじゃれつき遊びの支援のための理論生成を目指す。

関根 正美 (msekine@nittai.ac.jp)

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は高橋浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 18 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
久保正秋（会長）
編集者 小林日出至郎（広報委員長）
発行日 平成 26 年 11 月 21 日
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐 2 の町 8050
新潟大学教育学部 025-262-7075（直通）
アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

【編集後記】

ESDは「生きる力」の育成と共に、一人ひとりの重要な課題です。グローバル化の中、自然と人間の調和を基調とする、持続可能な社会の実現に向けて、日々の行動を工夫し実践することが求められております。体育やスポーツ教育も、この観点と連動しています。元気で健康な生活を目指しつつ、地球環境と他の生命に対して優しい具体的実践に繋がる身体運動の工夫が課題です。美しい空・海・山から私たち人間は、衣食住の恵みを賜り、先祖・父母・師等のお蔭様により、今を生かされております。他のいのちを深慮した良い汗を日常において、どのように流すことができるのか、これに繋がるいくつかの示唆がこの会報に綴られております。ご寄稿頂いた方々に心から感謝すると共に、会員みな様の益々の健勝を心からお祈り申し上げます。(K)